

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



菊池容斎（天明八）明治十／一七八八（一七八七）  
《蒙古襲来之図》  
文久二年（一八六二）絹本淡彩 掛軸  
縦二六・二一 横八三・二一  
山下一郎氏寄贈

いわゆる元寇に材を取り、暴風雨によって壊滅状態になる海上の蒙古軍と、松林の中からそれを見る日本の武士の一群を描く。容斎は、『蒙古襲来絵詞』（鎌倉時代、宮内庁三の丸尚蔵館蔵）の模本を残しており、騎馬人物や蒙古軍の描写などにはその成果が生かされるが、水平線を明確にし、海原の遠近感を強調した表現には、幕末の新しい感覚を見ることが出来る。

蒙古襲来の図はこの頃さかんに描かれており、外敵の脅威を退けた歴史的な主題に、幕末の攘夷思想が託されたものと解釈されている。容斎は、早くも弘化四（一八四七）年に同主題の作品（東京国立博物館蔵）を描いているが、その賛には、元寇の折に活躍した武将、菊池武房の名を、自らの遠祖として記す。幕末という時代状況をベースとして、勤王画家容斎の、みずからの出自に対する自負をも織り交せて成立した、特殊な奥行きを持つ作品といえる。

（上席学芸員 石上充代）

※収蔵品展「日本画の情景―幕末から近代へ―」に出品しています。（十月十四日まで）

No.  
131  
2018年度 | 秋 |

# 狩野派が現代人に教えてくれること

館長 木下直之

途方もなく暑かった今年の夏の、飛び切り暑い日に、名古屋城本丸御殿を訪れました。平成二十一年（二〇〇九）に始まり、十年を費やした復元工事がようやく竣工し、一般に公開されたのです。工事は木造による忠実な復元ですから、御殿には冷房設備がなく、中に入ってもなお暑さに苦しみました。

しかし、世が世なら、Tシャツに短パン姿で御殿に入ることなど許されるはずはありません。お城に入ろうとした時点で、斬って捨てられたでしょう。もちろん、城内にあっては、將軍だろうが殿様だろうが軽装は許されず、正装し威儀を正さねばなりませんでした。

これまでも御殿は段階的に公開されて来ましたが、今回は、その最深处、格が最も高い上洛殿に入ることが出来ました。上洛殿は、その名のとおり、寛永十一年（一六三四）に上洛する三代將軍家光のために建てられました。その後はほとんど使

われることなく、二百三十余年の歲月が流れ、明治維新を迎えたという今の世では考えられない贅沢な建物です。昭和二十年（一九四五）の空襲で焼失して以来、七十三年ぶりの復元ということになります。

さて、上洛殿は主に六つの部屋から成ります。三之間、二之間、一之間と進み、そこで上段之間に繋がります。つまり、上段之間の將軍と一之間の藩主とが対面するように配置されています。まるでジョーダンではないか、といつも思うのですが、上段之間は一之間よりも一段高く作られています。これによって、將軍の「上から目線」が可能になります。御殿とは、平面だけではなく、立面においても空間が厳しく序列化されているのです。

身分や主従関係に従って座るべき場所が決まるという、当時の人間関係を反映した、ある意味とても「人間的な空間」なのです。これに応じて、絵画、彫刻、飾り金具などによ

る装飾が施されます。狩野派とは、何よりもまずこの大切な仕事に従事した画家たちのことです。したがって、彼らが何を描いたか（何を描くように命じられたか）が重要です。

上洛殿の装飾は狩野探幽が担いました。三之間、二之間、一之間、上段之間の襖（すなわち各空間を仕切る壁面）には、それぞれ四季花鳥図、琴棋書画図、帝鑑図、帝鑑図が描かれました。最後の二部屋を飾る帝鑑図とは、為政者のあるべき姿を示した中国の故事に基づくものです。為政者が中国に範を求めるぐらいですから、当然、画家たちにとっても、仰ぐべき範は中国の絵画にあります。これが、現代とは決定的に違っていることです。さらに、現代よりもはるかに絵画が建物と密着していたことも、見逃してはいけません。「御用絵師」という言い方がありません。御用を、現代ならば公務と呼ぶでしょう。公共空間を装飾するため

公務員画家、しかもそれは世襲、あるいは養子縁組によって継承されたと考えると、狩野派の立場がいくら分かるかなと思いましたが、やっぱり無理ですね。そんな画家たちは現代にいないし、公共空間も人間関係も変わってしまったからです。

狩野派を現代に引きつけて理解するのではなく、彼らの生きた時代を丸ごと知ろうと努めることが大切です。そうすれば、しばしば非難の対象になる世襲制度や粉本主義も、技術伝承の観点から納得できます。

そうした彼らの社会が揺らぎ、崩れ、最後には消えてしまった時代が幕末維新期でした。仕事の発注者であつた幕府も藩もなくなり、御殿は無用の長物と化し、大半の狩野派の画家たちが職を失いました。武士がそうであつたように、それぞれの画家もまた新たな生きる道を見つければなりませんでした。

美術館は美術館である以上、御殿とはかけ離れた空間で、「幕末狩野派展」を美術作品展としてお示します。しかしそれに止まらず、彼らの時代の彼らの価値基準、行動規範、空間感覚などを想像しながら会場を歩くことをお勧めします。逆に現代の社会と美術がどのような関係にあるのかを教えてくれるはずです。

# ロダン館に寄せて

静岡大学教育学部准教授（作曲・音楽理論） 長谷川 慶岳

今から六年前、初めてロダン館を訪れた時のことを今でもはっきりと覚えていきます。

ご縁があつて作曲・音楽理論の教員として静岡大学に着任し、身寄りのない静岡に来たばかりの当時、独り身の気軽さから静岡のあちらこちらをドライブして回っていたのですが、ふとしたきっかけで長らく足が遠のいていた美術館に行ってみようと思ひ立ったのでした。展示を拝見してそのままロダン館に足を踏み入れたのですが、広々とした空間に高い天窓から夕刻の柔らかな外光が差し込む中、ロダンの偉大な作品を初めてじっくり鑑賞した体験はなんとも言えない強い印象を私の中に残しました。

その翌年に思いがけず、ロダン館で何か音楽イベントを企画して欲しいというお話を頂きました。これは文化庁助成「静岡大学アートマネジメント力育成事業」の一環として、さらにロダン館開館二十周年記念の

関連イベントとしての企画でしたが、内容についていろいろ考えあぐねた末、当時私の研究室で作曲を学んでいた学生達と一緒に演奏会を作ろうと決めました。私と六名の学生、各々が展示されているロダンの彫像作品を題材としてピアノ曲を制作し、発表するという演奏会で、「Rodin inspires Composers」と題しました。皆がひと夏かけて制作に取り組み、十月に始まった後期授業の折に彼らの楽譜を見た時には、私が手直しする余地のほとんどない完成度の高い作品が揃いました。演奏会当日は作曲者自身による自作解説を交えながら、ロダンの作品から靈感を得たピアノソロ作品全七曲が静岡大学の教員と学生の手によって初演されました。幸い多くのお客様にお越しいただき、私にとって忘れられない演奏会の一つとなっています。

昨今、人々の消費行動が「モノからコトへ」とシフトしてきたと言わ

れます。私自身、近頃物欲がなくなつたなと思うことが多く、これは単に加齢のせいかと思っていたのですが、どうもそうではなく、若い人たちも含めて世の中全体の傾向のようです。右肩上がりの成長に伴う大量消費社会が陰りを見せ、人々が心の豊かさを求めて、「モノ」ではなく経験や体験に重きを置き始めたのでしよう。これは日本の社会がある意味成熟した証左とも言えるのではないのでしょうか。

美術館（願わくば演奏会も）に足を運ばれる方たちはきつと心の豊かさを求めて、また非日常を体験したくていらつしやるのだと思います。コンピュータやネット環境がさらに進化してあらゆるコンテンツがアーカイブされ、VR（仮想現実）がいくら身近になろうとも、その場所に足を運んで本物が発するアウラにリアルで触れる経験の価値はこれからはますます変わらなはず。かつて私が通っていた小学校の中庭の真

ん中に鎮座していたレプリカの「考える人」（確かプラスチック製で叩くとボンボンという虚ろな音がしました）ではなく、このロダン館で初めて実物に触れた時の衝撃が私の中に何かを立ち上げたように：

静岡県立美術館がこれからも変わらず素晴らしい「コト」を提供してくださる場であつてほしい、さらに音響の素晴らしいこのロダン館が、ロダンの偉大な作品のみならず、音楽を聴くという「コト」も提供してくださる場であり続けてほしいと心より願っています。

長谷川慶岳（はせがわ・よしただ）氏

静岡大学教育学部准教授。専門は作曲・音楽理論。二〇一四年以降、毎年当館ロダンウィーク内のコンサートにて楽曲を発表し、多くの聴衆を魅了している。本年はコンサート（十一月三日）に加え、長谷川氏制作の楽曲によるサウンド・インスタレーション「Homage to Rodin（ロダンを讃えて）」（十月三十一日～十一月三日）をロダン館にて開催。



ロダンウィーク演奏会にて（二〇一四年）

# みること・つくること

## ―夏休みワークショップ―

この夏、「安野光雅のふしぎな絵本展」関連教育普及イベントとして、「つみきのせかい」「オリジナルのかぞえてみようをつくろう」「あいうえお！トンガリ帽子をかぶって展覧会に行こう！」「みんなで作ろう！あいうえおの切り絵」の四つのワークショップを実施しました。展覧会との関連ワークショップで、みること・つくることを相互に関連できるプログラムを設定しました。

「あいうえお！トンガリ帽子をかぶって展覧会に行こう！」は未就学児を対象にしたワークショップです。まず、半円に切り抜いた色画用紙でトンガリ帽子を親子で作ります。出上来上がった帽子をかぶり、トンガリ帽子をかぶった妖精さんを探しに行こう、と意気揚々と展示室に向かいます。入口の天井からつりさがった



展示室にて

妖精のパネルを見つけると、気持ちは高まり、作品を食い入るように見つめています。「同じ色の帽子をかぶっているよ。」「階段ぐるぐるしてよ。」「何か話しているよ。」「疲れちゃってるね。」「つぶやきはどんどん出てきます。私たちが予想してい

たよりも多くの事を見つけ、思いもよらない想像の世界を話してくれました。「とんがり帽子の妖精さん」という見るポイントを示したことで、不思議の世界により入り込んでいき、絵をみる力が高まっていくように感じます。また、周りの来館者もトンガリ帽子をかぶった児童に出会い、不思議の世界に入り込んだような感覚になっていきます。

展示室から実技室に戻り、「あいうえお」をテーマにしたシールで帽子を飾りつけました。どのシールが良いか真剣に選び、どこについたら素敵になるか、親子で相談しながらつくりあげていました。「できた！」の満足げな顔で実技室はあふれていき



帽子を飾ろう

ます。その後、もう一度帽子をかぶって展示室に向かっていた親子の姿がありました。このプログラムを通して、みること・つくることが相互に関連し、感性や想像力の高まりを感じる事ができました。

ワークショップに参加していただいた半数は美術館デビューというお子さんたちでした。騒いでしまったり迷惑をかけるのではないかと心配する声も耳にしましたが、ワークショップ終了後「子供たちの美術館へのハートが下がり、とても楽しく過ごせました」と感想をいただきました。実技室のプログラムが美術館と皆さんとをつなぐ役割ができたら幸いです。

(主査 西島幸代)

# めがねと旅する美術展

## —視覚文化の探究—

2018年11月23日(金・祝)  
~2019年1月27日(日)

——「めがねと旅する美術展」がいよいよ来月に迫ってるね。

実は、本展には「めがね」はほとんど出品されないんです。

——え、じゃあ、いったい何が出品されるの？

はい。これについては、「めがねという道具に象徴される、私たちの視覚をめぐる探究の軌跡が紹介されます」とお答えいたしました。実のところ、本展の狙いはまさにこのことばに集約されているのですが……さすがにこれでは抽象的すぎてよくわかりませんね。

——うん、まったく。

それもあって本誌『アマリリス』の前号では、展覧会アニメ「押絵ト旅スル男」に登場する「のぞきからくり」の取材記を紹介したわけなのです。続く今回は展示内容をより具体的に紹介

していこうと思います。

まず「俯瞰」ということについて。人の視覚的欲求について考えてみますと、「高い場所から遠くを見晴らしたい」という欲望はまさにその原点と言えるのではないかと。なにしろ万葉集にも国見の歌が出てくるくらいですから。そういう誰もが持っている欲求がやがて展望塔、望遠鏡、飛行機、人工衛星といったさまざまな新視覚を生み出すというわけです。それらにまつわる資料や作品がいろいろ出品されます(図1)。

——なるほど。望遠鏡は遠「めがね」とも言うしね。でも、もうちょっとめがねらしいものはないの？

よくぞお訊きくださいました。江戸後期の「眼鏡絵」も展示されます。これは線遠近法を極度に強調した一枚物の絵画でして、これを凸レンズのついた器具で覗くと距離感が強調されて現代の3Dのような効果をもたらすというものです。さらにこの「覗き」とい



図1 不染鉄《山海図(伊豆の追憶)》1925(大正14)年  
公益財団法人木下美術館

う視覚行為を広く解釈しまして、解剖図や透視図も紹介します。

——ほかに？トリックアートとか今ちよつとはやってるでしょう？

ですね。本展にも視覚のトリックを用いた作品がいくつか出品されます。鏡を使ってピンポン球を一瞬のうちに染め変えたり、静止した平面なのに動いて見える錯視、あるいはおなじみ赤青めがねの立体視を大胆に拡張した体験型作品などですね。

——赤青めがね！それは懐かしい一口テクだな。逆にハイテクなものはないの？

バーチャルリアリティの研究成果を応用した作品が予定されています。それと、ステレオ写真による立体錯視を現代風に応用した映像作品なども御紹介します。さらに、先に申した「俯瞰」「覗き」にもかかわってくるものが、衛星から俯瞰した地球と月の映像、「マウスの神経細胞を可視化した映像」なども。これらは人の視覚におけるマクロとミクロの極みというわけですが、いずれもたいへんに美しい映像です。

——美術館らしい作品としては？

はい。二次元と三次元の表現特性を追究するような絵画や彫刻を御紹介します。風景画や肖像画というのはそもそも立体のモチーフを平面へと翻訳す



図2 山田純圃《(17-3) 舞妓林泉》  
2017(平成29)年 作家蔵

る作業を経ていくわけで、そういう意味では眼鏡絵やトリックアートだけではなく、あらゆる絵画が視覚の「次元越え」をしているわけです。そのあたりを意識した作品も出品されます(図2)。

——短編アニメがあるとさつき言っていたような？

「押絵ト旅スル男」ですね。のぞきからくりの押絵の娘に恋してしまった男とその弟をめぐる幻想譚です。江戸川乱歩の原作はまさに「視覚小説」とでも呼びたくなるようなもので、のぞきからくりのほかにも、浅草十二階凌雲閣、遠眼鏡、鉄道……といった近代の視覚的モチーフがふんだんに登場します。もちろんアニメでもそのあたりはしっかり押さえております。監督は「美少女の美術史」展で上映された「女生徒」で好評を博した塚原重義さん。さらに上映時間九分の短編ながら、細谷佳正さんと梶裕貴さんのトップ声優お二人、活動弁士の坂本頼光さんも声の出演をされます。

——なるほど。そりゃ楽しみだね。

どうぞごひいきに！(了)

(上席学芸員 村上敬)

# 白髪一雄の初期の展示活動について

主任学芸員 植松 篤

## はじめに

足でダイナミックに抽象絵画を描いた白髪一雄は、関西の前衛グループである具体美術協会（以下「具体」と表記）の代表的な作家として知られている。様々な実験的な試みに挑戦した「具体」の会員たちの作品は、国内外で評価が高く、当館も白髪を

はじめ「具体」の作品を複数点所蔵している。もともと、すでに知られているように白髪の足で描くという独特の描画方法は、「具体」以前に試みられたものである。

本稿では、白髪が具体に参加する以前にさかのぼり、白髪の活動の初期の段階について言及したい。なお、作品の変遷や現代美術懇談会（通称ゲンビ）や0会<sup>ゼロ</sup>といった美術家や表現者同士の交流は、これまでも画家自身も含めて言及されている。ここでは、美術家としての実践的な活動、すなわち展覧会について触れることとする。限られた紙面では詳らかにできないが、新たに判明した事柄に比重を置き、論じたい。

まずは、最初期の経歴について簡潔に述べる。白髪はもともと洋画（油彩）を志していたが、戦時中のため上京することは断念し、洋画科の無い京都市立絵画専門学校（現在の京都市立芸術大学）へ一九四二年に進学し、日本画を学んだ。白髪が卒業したのは、終戦の後に復員し、さらに病の療養を経た後の、一九四八年のことであった。卒業前には再び洋画に着手していたようだ。

その後、一九四九年から大阪市立美術館内の大阪市立美術研究所や、その翌年からは新制作協会（当初は、新制作派協会と呼称）に所属する伊藤継郎の元で洋画を学び直す。また、ジャンルを越えて表現者たちが集まった現代美術懇談会や新作展<sup>サクゼン</sup>の中にも先鋭的な表現する者らで結成したり会等に参加し、白髪は新しい表現を求めていく。そうした中で、その作風は抽象に向かい、「具体」期につながる身体で直接描いた作品を制作するようになる。

展覧会活動に目を向けると、当時、芸術



図1 撮影者不詳「第5回関西新制作展展示風景」1952年

家にとって作品を発表する機会は、美術団体の公募する展覧会や、自治体等による地域の公募展、無審査のアンデパンダン等、限られたものだった。

確認できる白髪の最初の出品歴は、大阪市立美術館での「第一回関西総合美術展覧会」であるが、これは、大阪市立美術研究所での研鑽の結果を試す場であつたらう。研究所の教育は、赤松麟作や小磯良平等、近隣の著名な芸術家によるアカデミックな内容だったが、この時、白髪は早描きのエスキースを元に寓話的なモチーフを描いた《魔曲》を出品した。

また、新制作協会の伊藤継郎から絵画を学んだ白髪は、一九五〇年からおよそ四年間、新制作協会が開催する「新制作展」（第十五回〜十八回）や「関西新制作展」（第三回〜第六回）に出品した。

白髪によると、「新制作展」の展覧会場では、あまり良い場所に絵を展示してもらえず、作品の傾向の違いも感じたそうであ

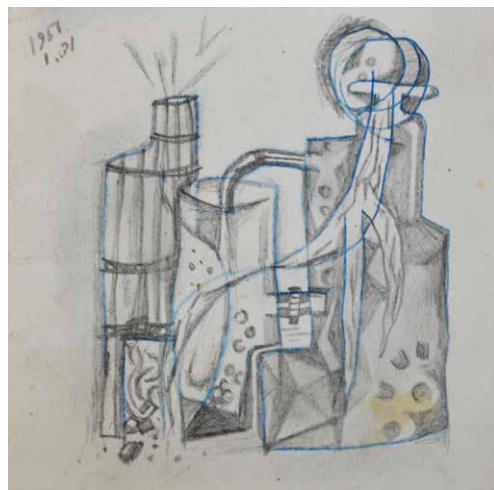


図2 白髪一雄（不詳エスキース）  
（所収「初期エスキース集」1948-1952年）1951年

るが、「第五回関西新制作展」（図1）では、《照魔鏡》と、タイトルは不詳であるがストロップの前で椅子に座る人物を描いたと思われる絵画を出品し、ホルベイン賞を受賞したこともあり、まったく冷遇されたわけでもなかった。会の一部だけでもいいが、会員の小磯良平と猪熊弦一郎は、白髪の絵画を評価していたようだ。なお、タイトル不詳の作品は、エスキース（図2）から白髪の商品であることが確認された。もともと、白髪の作風がさらに抽象に進み、変化していくにつれて、白髪の表現と会の傾向の乖離も広がることになる。新作展で活動を続けていくことに白髪が困難を感じたとしても不思議ではない。

ただ、幸いにも活躍の場は新作展に限られてはなかった。白髪が暮らしていた尼崎市には、かつては公募型の美術展はなかったが、白髪は、尼崎美術家協会の設立や尼崎市展の開催に向けて働き、一九五二年には、同協会と尼崎市の主催で第一回展が



図3 白髪一雄《骨董部屋エスキース》(所収「初期エスキース集」1948-1952年) 1951年

開催された。作品発表ということだけでは、他の地域の展覧会に出品するということもあつたろうが、白髪には地元文化の発展に貢献したいという気持ちもあつたのであろう。

白髪は具体的に参加するまで、この尼崎市美術展に毎回出品し、連続して賞を受賞している。審査員は洋画では小磯良平(第一回)、吉原治良(第二回)、伊藤継郎(第三回)や中村真(同)といった、関西の著名画家が務めた。

第一回展の白髪の出品作は、新聞記事によると《骨董部屋》という作品で、美術協会賞を受賞した。本作は現存していないが、元となったエスキースを確認することができ(図3)。白髪は油彩画制作の際、比較的エスキースに忠実に制作していたから、実作もフォルムについては大差なかったと考えられる。

白髪の作品の抽象化はタイトルから察するに、一九五二年九月の第一六回新制作展《鼠の巢》出品)から一九五三年五月の第六回関西新制作展《153セルロース展》《153セルロース放》出品)の間に著しく進んだと見られる。白髪は、部屋シリーズである《骨董部屋》や《鼠の巢》の次の展開を試みていた最中に失敗し、それをナイフで削ったのが、変化のきっかけだった。白髪はその際に絵具の流動性を生かす描き方に気が付き、尼崎市展の第二回、第三回では、その方法で描いた抽象作品を出品し、それぞれ《流脈》が文化協会賞を、《文》が教育委員会賞を受賞した。

ある意味では、表現にある種の傾向があるような新制作展といった団体展よりも、多種多様な作品が並べられる尼崎市展は、新しい試みの成果を問うにはふさわしかったとも言える。限られた一地域での展覧会とは言え、著名な洋画家らに評価されたことは、白髪にとつては、その方向性を進める後押しにもなったのではないだろうか。付け加えると、受賞こそ無いが、一九五三年からは現代美術懇談会のゲンビ展が開催され、白髪も第一回展から第三回展まで抽象作品を出品している。こうして白髪は、頭角を現すと言えは過言かもしれないが、地歩を固めつつあった。作家活動の蓄積に伴い、白髪は社会的にも画家として位置づけられていくことになる。

足で描くという奇抜な方法のため、メディアには揶揄されることが多かった白髪であるが、地域に根づいた活動をしてきたためか、一方では地域の文化的な扱いもされてきた。あるいは、そうした振る舞いも

求められていたと言ひ換えることもできる。当時の記事に目を向けてみると、具体加入直前の頃には、白髪は毎日新聞へ寄稿した文の中で、一般のモダンアートに対する理解について苦言を呈しており、また尼崎市の広報誌では、一九五五年の尼崎市政を振り返る紙面にて、各界からの意見と並んで、白髪は地元尼崎の文化の発展を願う意見を載せている。東京への進出や国際的な関連等が論じられる「具体」だが、当然ながら同時に作家は地方の美術界や社会との関連の中に配置されてもいた。白髪は、一画家として、このようにしてスタートを切ったのであつた。

- \*1 白髪一雄、針生一郎(対談)「上方あくしよんだんき」、『白髪一雄』、東京画廊、一九七三年、頁記載なし。
- \*2 写真による「ホルベイン賞」の文字が確認できる。白髪による裏書きにも展覧会名や受賞の情報があるため、さらなる調査が必要である。
- \*3 前掲書1。
- \*4 『市報あまがさき』一八六号(一九五八年六月五日)には「尼崎市美術家協会創立十周年を記念」とあるので、一九四八年の創立と考えられる。
- \*5 著者名記載なし「尼崎市展」入選者、「神戸新聞」尼崎版「一九五二年七月六日」。
- \*6 同上。
- \*7 柚木伸一「白髪一雄論(1)」(足描き)の美学「生い立ちの前後」、『国際美術』第三号、一九六五年一月一日。
- \*8 著者名記載なし「尼崎市展の洋画入賞者決まる」、『神戸新聞』阪神・尼崎版「一九五三年七月二六日」。
- \*9 白髪一雄「あれこれ放談 リレレ登場 不思議な世間の人 モダンアートに理解を」、『毎日新聞』一九五五年一月三〇日。
- \*10 白髪一雄、他「さようなら1955年 市政ハイライトと市民の市政感想」、『市報あまがさき』二二七号、尼崎市役所市長室、一九五五年二月二〇日。

## 漢文脈と近代日本

齋藤希史

### 本の窓

齋藤希史著  
『漢文脈と近代日本』  
角川ソフィア文庫 二〇一四年

私たちはときに無造作に「昔の人には漢学の素養があつた」などという言い方をします。本書は、そのカンガクソウウとやらはけっきょく何なのかを、江戸後期の頼山陽から大正・昭和の芥川・荷風・谷崎まで読み解いていく試みです。明治中頃までの教養人にとって、漢文の読み書きは中国の士大夫の精神に自らを重ね合わせていく営みでした。それは天下国家を論じる公的側面と琴棋書画に興じる私的側面という二つの焦点を持つ楕円構造の世界であり、そういう体系を著者は「漢文脈」と呼びます。漢文脈はやがて近代日本の公的文体としての今文体(漢文訓読風の文体)を導くと同時に、それとはまったく対照的な私的領域に属する支那趣味小説等の耽美的世界を支える意匠ともなりました。そのとき、そこには漢文脈を換骨奪胎した新たな脈絡が呼び込まれることとなります。長らく東アジアの人文的基盤であつた漢文脈が、近代日本を駆動する新文体の中に分解・消費されるありたい——日本絵画の近代を考える上で重要な示唆的な問題です。(上席学芸員村上敬)

# ロダンマルシェ

草薙マルシェ実行委員会 代表 大畑守

草薙マルシェを二〇一三年に立ち上げた翌年、当時副館長だった坂田さんの「地域住民に親しんで頂ける美術館にしたい」とのコンセプトに共感させて頂き、県立の美術館としては他に類を見ない、マルシェイベントを開催させていただく事になりました。

当初は、手探り状態で始めたロダンマルシェですが、様々な方達のご協力と、緑に囲まれた抜群のロケーション、秋風が心地よい季節も相まって、毎年五〇〇人を超える多くの方々に愉しんで頂いております。ただ、残念ながら当初の目的を達成できているとは思えません。より多くの方々に



昨年の様子

巻き込みながら、美術館を始め、草薙地区の魅力の発信に取り組んでいきたいと思えます。

今年も十一月三日の文化の日開催ですが、早いもので五回目となります。

一昨年からは、プロムナードを使用して、若手のアーティストさんによる、展示や演奏などを行い、より美術館らしいイベントになってきていると思います。

現在、準備に奔走しておりますが、目的はあくまでも美術館に来館するきっかけづくりであることを忘れずに、美術館ならではのマルシェとなるようにしていきたいと思えます。



プロムナードでの生演奏

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737  
ウェブサイト：http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

無料託児サービス  
毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2  
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



## 静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 「ロダンウィーク」イベント・スケジュール

2018年ロダン・ウィーク特別上映  
『ディヴィノ・インフェルノーそしてロダンは《地獄の門》を創った』  
11月3日(土・祝)14:00～、11月4日(日)11:00～ 講堂 申込不要  
(各回定員250名、先着順)  
2017年にロダン没後100年を記念して制作された映像作品の上映

丘の上の「ロダンマルシェ」  
11月3日(土・祝)10:00～16:00 美術館正面広場 申込不要 (荒天中止)  
草薙マルシェ実行委員会がプロデュースする「フランス風のグルメ、雑貨&パフォーマンス」

ドビュッシーとロダン ～カミーユが愛した二人の芸術家～  
11月3日(土・祝)15:30～ ロダン館 申込不要  
静岡大学協力によるピアノとフルートの演奏

ギャラリートーク  
11月3日(土・祝)12:30～  
ロダン館 申込不要  
静岡大学の学生によるロダン作品の解説

友の会ひろば  
11月3日(土・祝)10:00～15:30 美術館正面玄関前 申込不要 (小雨決行)  
美術館友の会が企画・運営するタブレットでお絵かき・にお絵・作家たちのワークショップ等

草薙ツアークループ「呈茶サービス」  
11月4日(日)11:00～14:00 美術館正面玄関前 申込不要  
美術館ボランティアによる美術館の茶畑でとれたお茶のサービス

「静岡の名手たち」ロダン賞コンサート  
11月4日(日)14:30～ ロダン館 申込不要  
AOI「静岡の名手たち」ロダン賞受賞者によるピアノ&ヴァイオリンの演奏

めぐりアート静岡  
10月23日(火)～11月11日(日)  
本館エントランス、フリッジギャラリー横ラウンジ  
静岡市内の様々な会場をめぐりながら今を生きるアートを楽しむ展覧会

サウンドインスタレーション「Homage à Rodin(ロダンを讃えて)」  
10月31日(水)～11月3日(土・祝) ロダン館  
美術作品と静大長谷川慶岳氏作曲の音楽のコラボ

ちょこっと体験講座 ミニ考える人づくり  
10月31日(水)～11月4日(日)10:00～12:00、13:00～15:30  
本館エントランス 申込不要  
ミニ考える人の作成

※11月1日(木)～4日(日)はロダン館観覧無料

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。